

戦後日本とフィリピン

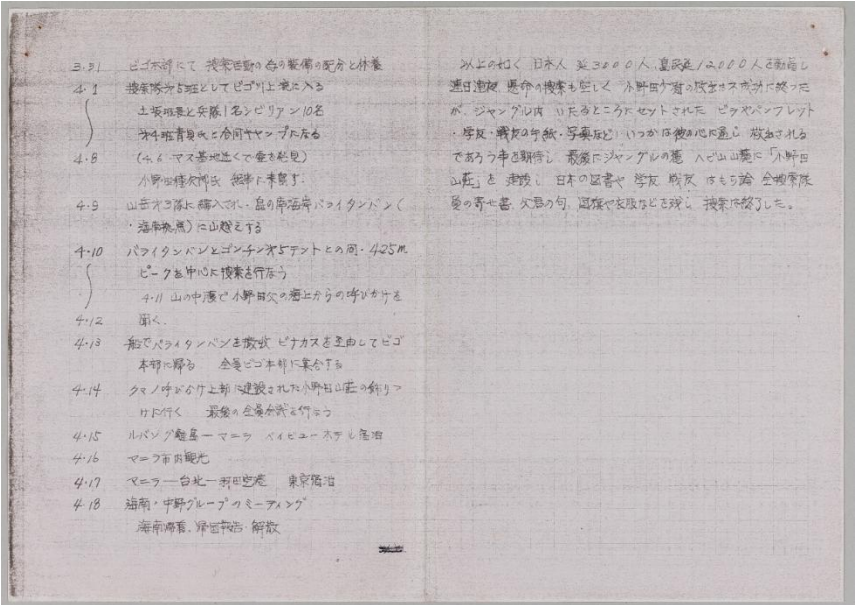
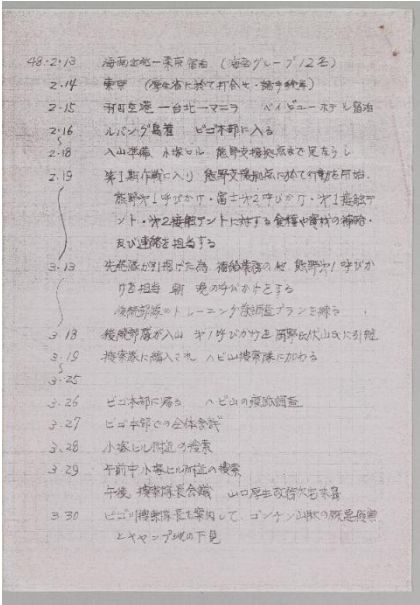
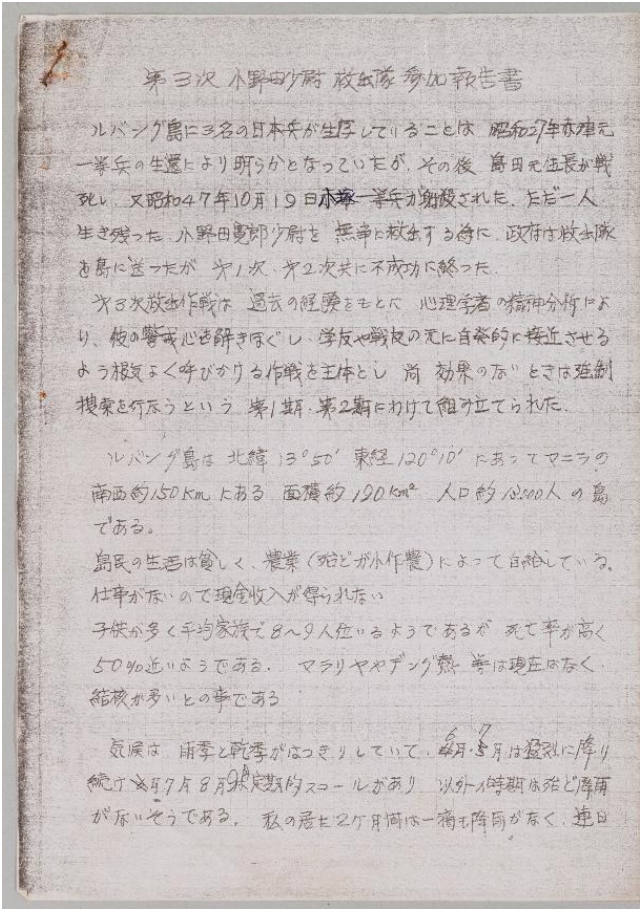
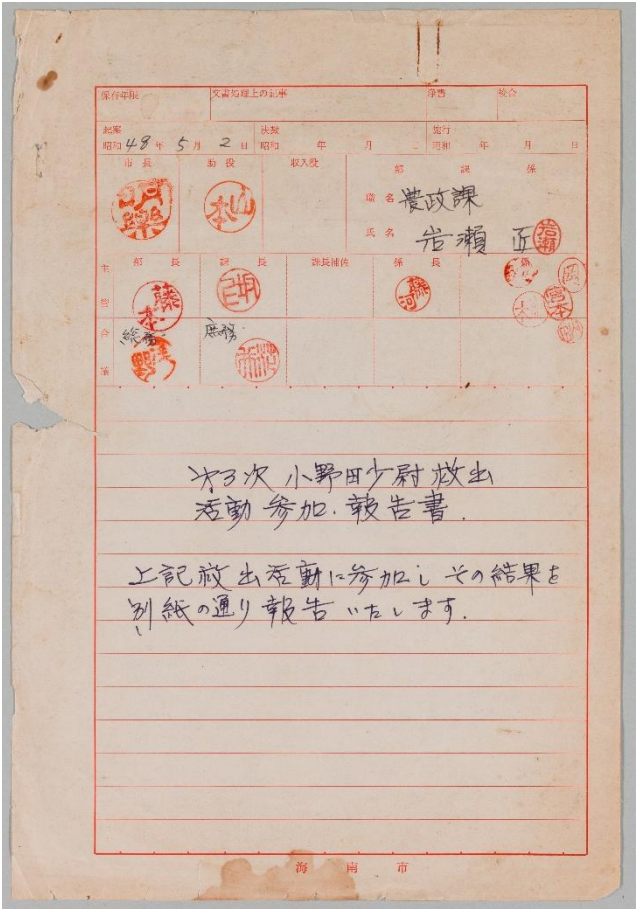
—戦闘を続けた日本兵の捜索—

太平洋戦争の激戦地となったフィリピンでは、1945(昭和 20)年の終戦以降も一部の日本兵が投降せず戦闘を続けており、和歌山県出身の小野田寛郎もその一人でした。今回は、1973(昭和 48)年の日本とフィリピンによる合同の捜索活動の記録から、戦後の日本とフィリピンの国際関係についてみていきます。

1 資料

【資料】第3次小野田少尉救出活動参加報告書等（一部抜粋）

[* 資料のデジタル画像を見る](#)



(1) フィリピンの歴史

フィリピンは、16世紀にスペインの植民地になり、19世紀末に独立戦争が起りましたが、1898年のアメリカ＝スペイン戦争以降、統治権を得たアメリカに鎮圧され、支配されていました。

1941(昭和 16)年に太平洋戦争が始まると、日本はフィリピンを始めとする東南アジアのほぼ全域を占領しました。日本は、欧米支配からの解放をうたい日本の占領地拡大を正当化する「大東亜共栄圏」の建設を掲げましたが、東南アジアには抵抗した人々がいました。フィリピンは、太平洋戦争の激戦地となり、民間人犠牲者は約 100 万人、日本兵の犠牲者も約 40 万人にのぼるとされています。

戦後、1946 年にフィリピンは独立して、アメリカとの友好関係を築き、冷戦下において日本と同じアメリカ陣営につきました。1965～86 年の間、大統領だったフェルディナンド・マルコス(Ferdinand Marcos)によって、自由や人権を軽視し資本主義による経済発展を重視する開発独裁が行われました。

(2) 小野田寛郎と残留日本兵

1922(大正 11)年、海草郡亀川村(現・海南省)で生まれた小野田寛郎は、旧制海南中学校(海南高校の前身)を卒業後、貿易商社に就職しました。20 歳になった 1942(昭和 17)年に陸軍に入営し、1944(昭和 19)年にフィリピン・ルバング島へ渡りました。小野田ら数名の日本兵は、終戦後もそれを信じずに戦闘を継続しました。そのため島民の被害が続き、1950 年代には日本から搜索隊が派遣されましたが発見されず、小野田らは死亡したと認定されました。小野田らは、搜索隊が残した新聞や島民から奪ったラジオで戦後の日本のようすを知っていたが、その日本はアメリカの植民地であり、中国東北部(旧満洲)に亡命政権があると思っていたと、後年、語っています。

1972(昭和 47)年 10 月、フィリピン警察が小野田とともに戦闘を続けていた小塚金七を射殺、そのとき小野田が目撃されたことによって生存が明らかになりました。フィリピンのマルコス大統領は、経済援助を受けている日本との友好関係を崩したくない考えもあり、日本と協力して小野田の搜索を開始、身柄を確保した場合、すぐに日本に引き渡すと約束しました¹。

(3) 本資料について

本資料は、日本とフィリピンの共同で行われた 3 回目の搜索活動に参加した海南省職員員の記録です。その中には、職員が 1973(昭和 48)年 2 月から 4 月までの搜索中に持ち歩いて記録したノートや帰国後に作成した海南省への報告書があります。報告書には、「彼の警戒心を解きほぐし、学友や戦友の元に自発的に接近させるよう根気よく呼びかける作戦を主体とし」とあり、4 月 11 日には「山の中腹で小野田父の海上からの呼びかけ」があったと記しています。後に小野田は、父の声は聞こえなかったが、兄弟の声は聞こえたと言っています。また、「へビ山山麓に『小野田山荘』を建設し、日本の図書や学友戦友はもち論 全搜索隊員の寄せ書、父君の句、国旗や衣服などを残し」た、とあります。

結局、この搜索活動で小野田は救出できませんでしたが、翌年、探検家の鈴木紀夫と小野田の遭遇をきっかけとして、かつての上官からの任務解除命令を受けて投降が実現しました。小野田が投降した要因には、島で家族の声を聞いたこと、搜索隊が残した新聞を何度も読んだこと等の小野田に対する友好的な態度を取った搜索活動の影響もあると考えられます。

帰国後、29 年間ジャングルで生活をしていた小野田は、戦後日本の暮らしになじむことができず、ブラジル移民であった兄を頼ってブラジルへと移住し、農業に従事しました。



帰国後の小野田寛郎(右)と
大橋正雄和歌山県知事(左)
当館蔵「内畑弘氏旧蔵資料」

¹ 残留日本兵によって死傷し、財産を奪われたルバング島の被害者に対する直接の補償はありませんでした。

3 活用のポイント

● 中学校社会〔歴史的分野〕の場合…C 近現代の日本と世界

第二次世界大戦を学習する際に、身近な和歌山県出身の兵士として小野田寛郎を取り上げ、「なぜ小野田は終戦後も 29 年間、フィリピンのジャングルで戦闘を続けたのか、想像してみましょう。」と問いかけ、解説シートを活用して例えば「上官の命令には背いてはいけないと信じていたから。」「最後まで戦い名誉の戦死を遂げるべきで、投降すれば戦犯として殺されると考えていたから。」などと予想することで、戦時下の日本兵の考えの一例を考えることができます。

● 歴史総合の場合…D グローバル化と私たち

第二次世界大戦を学習する際に、この解説シートのほか、解説シート「沖縄戦―生還した者の慰霊と語り―」、「太平洋戦争の犠牲者―戦死した作曲家兼音楽教師の記録―」を合わせて、太平洋戦争に従軍した人に関する授業を構成することができます。この解説シートからは、「フィリピンのジャングルで戦闘を続けた小野田は、戦後どのように生きていたのでしょうか。」や「小野田は、戦後、人々からどのように捉えられていたのでしょうか。」と問いかけることで、20 代から 40 代までの間、戦闘を続けていたことや帰国後の日本での生活になじむことができなかったこと、ルバング島の住民からは恐れられていたこと、日本からは大規模な搜索活動が行われて注目を集めていたことなどを知り、他の戦死した者と生還した者の解説シートと合わせて、戦争が人々に与えた影響を考えることができます。

● 世界史探究の場合…E 地球世界の課題

地球世界の課題の探究を学習する際に、本資料や解説シートがフィリピンの開発独裁の事例として活用できます。例えば、「ルバング島の人々は、小野田ら日本兵に対してどのような感情を持っていたのか、想像してみましょう。」と問いかけ、ルバング島の人々は安全に暮らすことができずおびえていたと予想できます。さらに「なぜマルコス大統領は、島民の被害を軽視して、日本の小野田の搜索活動に協力したのでしょうか。」と問いかけ、マルコスはフィリピンが貧困から脱却し経済成長するために独裁を正当化しており、多額の経済援助をしていた日本との友好関係を維持することで経済成長につながると考えていたことを考察し、経済発展のあり方について探究することができます。

4 出典

- ・当館所蔵 第 3 次小野田少尉救出活動参加報告書等

5 関連資料・ウェブサイト等

- ・[「一般財団法人 小野田記念財団」](#)
- ・[「比国ルバングの元日本兵の生還を期する決議」](#)（国立公文書館デジタルアーカイブ）

6 参考文献

- ・大野拓司、寺田勇文編著『現代フィリピンを知るための 61 章【第 2 版】』明石書店、2009 年
- ・小野田寛郎『たった一人の 30 年戦争』東京新聞出版局、1995 年
- ・五十嵐恵邦『敗戦と戦後のあいだで 遅れて帰りし者たち』筑摩書房、2012 年
- ・永井均「フィリピンから見た残留日本兵問題―ルバング島での搜索活動を中心に」(『HIROSHIMA RESEARCH NEWS』Vo.22 No.1、広島市立大学広島平和研究所、2019 年)